網走月報

教祖140年祭
三年千日の
活動方針

「教祖のひながたを目標（めどう）に
全教会心定めの達成」

◇11月月次祭 世話人久保善平先生御巡教◇

おぢばの理と、勇みの種を頂いた。

◇年祭活動３年目に向け 部内巡教始まる◇

11月1日～１月12日までの間に、各教会で巡教が
行われます。詳細は各教会へお尋ね下さい。

大教会のHPがご覧になれます！
月報には掲載されない写真もいっぱいです！
ぜひ一度ご覧下さい♪

発行所
天理教網走大教会
布教部出版広報掛
〒093-0073
網走市北3条西6丁目
TEL 0152-43-2227
FAX 0152-44-2227

大教会十一月月次祭

大教会11月の月次祭は、12日午前9時30分から大教会長祭主のもと、執行された。

大教会長は祭文で、親神様の御守護に御礼申し上げた後、「十月御本部大祭にて、有難くも真柱様よりご挨拶を頂戴し、その中で年祭に対する取り組みがまだまだであり、三年千日の期間は動かせて頂くことが大切とのお言葉を頂戴しました。いよいよ仕上げの年になる来年は、大教会に繋がるたくさんのようぼくが、年祭に心を向け、年祭に向かって動いてもらえるよう、教会長夫妻が一丸となって取り組ませて頂きます。」と奏上した。

その後座りづとめ・十二下りのてをどりが勤められ、参拝者は共に勇んでみかぐらうたを唱和した。

神殿講話　世話人 久保善平先生

神殿講話抜粋

◆秋季大祭の意義◆

秋季大祭は立教の元一日に思いを馳せてつとめさせて頂いているのであります。

この教えが始まるその時に、教祖のお口を通じて仰せられた親神様のお言葉の中には『このたび、世界一れつをたすけるために天降った』という一節もあれば、また『神の言う事承知せよ、聞き入れくれた事ならば世界一列救けさそ』という一節もあり、親神様の世界一れつの人々をたすけたいが為にこの教えを説き始めるんだという、強い思召を伺うことができるように思っています。

親神様は世界たすけのこの道を始めるため、教祖を月日のやしろとお定めになりました。おふでさきに、

いまなるの月日のをもう事なるわ　くちわにんけん心月日や　（十二―67）

しかときけくちハ月日がみなかりて　心ハ月日みなかしている　（十二―68）

とお教え頂きます。

これは教祖のお姿というものは普通人間の姿と何ら変わりはないけれども、そのお心は親神様のお心そのものなんだ。親神様は教祖のお口を通してその思召を教えて下さっているんだということを明らかにお示し下さっているのだと思っています。

教祖のお言葉は親神様のお言葉。教祖のお心は親神様のお心。これを信じることが大事であります。教祖は

いちれつにはやくたすけをいそぐから　せかいの心いさめかゝりて　（一―8）

このはなし一寸の事やとをもうなよ　せかい一れつたすけたいから　（四―126）

どのよふなくどきはなしをするのもな　たすけたいとの一ぢよばかりで　（七―26）

とお示し下さいますように、先程も申しましたけれども、何とかして世界中の人間をたすけてやりたい、との御心で私たちにこの教えをお説き下されたのであります。

では、なぜ世界中をたすけたいのでしょうか。私はそれは親神様と我々人間との間柄が親と子、親子だからだと思っています。親神様のもとに等しく子供である全ての人々。つまり親神様から見れば、我が子皆をたすけてやりたいという親心が、この教えには込められているんだと言っていいと私は思っています。

せかいぢう神のたあにハみなわがこ　一れつハみなをやとをもゑよ　（四―79）

このはなしとこの事ともゆハんでな　せかいちううハみなわがこやで　（十五―68）

とおふでさきでお教え下さっています。

親神様と私たち人間との間柄は親と子であります。親神様は自分のことを親と思ってくれ、お前たちは皆私の子供なんだと仰せ下さっている、そう感じます。

逸話篇104の「信心はな」というお話の中では教祖が「神さんの信心はな、神さんを、産んでくれた親と同んなじように思いなはれや。そしたら、ほんまの信心が出来ますで。」と仰せられたと記されています。

人間でも親というものは我が子のことを思ってあれこれと口を出すのでありますが、子供からすればそれを時にはうるさく思い、なかなか親の気持ちを分かってはくれないのであります。

孝行のしたい時分に親はなし。ということわざもありますが、それこそ年齢を重ね親と離れて様々な経験を経て、ようやく親の気持ちというものが、またその有難みが分かってくるような気がいたします。

私たちがこの道を通るにあたって親神様を、そして教祖を自分を産み育ててくれた親と同じように思ったときに、それぞれの信仰、信心というものが一段と進んでいくということを教えて下さっていると思います。

◆順序の大切さ◆

明治二十年八月二十三日のおさしづに、

「立毛の育つも、この世始めも同じ事、無い人間を拵えて、初めより、ものが言えたやない。一年経てば一つ分かる。又一つ分かれば、又一つ分かるように成って、もの言うように成りたも同じ事。順序事情の道を伝うて、何事も一つ〳〵分かる。」

とお示し下さっています。

親神様はこの世の元初まりにあたって、何にもない泥海の中から我々人間を拵えて下さったのでありますが、人間は最初から今と同じ大きさではありませんでした。

親神様は何にもない紋型ないところからこの世人間をお始め下されたばかりではなく、九億九万年は水中の住居、六千年は知恵の仕込み、三千九百九十九年は文字の仕込みとありますように、長い年月限りのない親心をもって、成人の守護を下され、時に応じて旬々の仕込みをなされて、人間を今のような姿にまで育て導いて下さったのであります。

元の理のお話の中で三尺に成人した時にものを言い始め云々とありますように、最初から人間はものを言えたわけではありません。段々段々と親神様のお導きを頂戴して成人していく中で、初めて言葉を話すことができるようになったのであり、そこに至るまでには様々な順序を踏んで、少しずつ少しずつ育っていったのであります。だからこそおふでさきの中で、

月日よりたん〳〵心つくしきり　そのゆへなるのにんけんである　（六―88）

と教えて下さっているのだと思います。

私は物事が成ってくるには必ず順序というものが存在し、物事が成るためには必ずある程度の時間がかかるものだと思っています。

教祖が人々に教えを説いて導かれた、いわゆるひながたの道中にも順序というものがあったのではないかと考えています。何も知らない、分からない人たちに、分かってもらうために、この道を通ってもらうために、教祖は順序を整え、道をつけて下さったんだと思っています。

親として何も知らない子供に物事を教え、身に付け、理解させていくのと同じように、教祖はひながたの親として、物事の順序を踏まえた、深く熱い親心による心配りをなさって下さったと思っているのです。

例えば、大切なおつとめ、これも立教後すぐに教えて下さったわけではありません。大事だからまず最初に教える、ということではなかったのではないかと思うんです。

教祖は、慶応二年から十年の年月をかけて人々におつとめを教えて下さったのであります。今の私たちは、これほどの時間をかけて人におつとめを教えるということはあまりないように思います。

十二下りのおつとめを全て教える、おてふりを覚えてもらうまでに時間がかかる、時間を要するということはあるかもしれませんが、あしきをはらうての歌や手振りは、それこそにをいがかかればすぐにでも学んでほしい、身に付けてもらいたいと思って教えるのではないでしょうか。

教祖のひながたから考えれば、我々はまだまだせっかちなのかもしれません。教祖は何も分からない、何も知らない人々に、いきなりおつとめを教えるということはなさらなかったのであります。

御自ら貧に落ち切る道を通り、誰も寄り付かない時を過ごしながら、おつとめを教えたら分かってくれるような人が寄ってくるまでだんだんと下地を整え、人が寄ってくるようになってからも、人々がおつとめを受け止めてくれるまで、時間をかけて人々を丹精し、頃合いを見計らっておつとめを教え始められたのではないでしょうか。

こうしたことはおつとめだけではないと思います。教祖はこの教えが分かるように人々を育て導き、分かるように言葉や態度を駆使して教えを説かれました。

私たちも人様にこの教えを伝えるにあたって、またあとに続く人たちを丹精するにあたって、どうした順序で、どのようにして時を使い、どのような言葉を用いればいいのか、よくよく考えながらつとめさせて頂きたいと思うのであります。

◆親の心◆

さて、人間がまだまだ何も分からない小さな子どもを育てるということに思いを致した時、私はもう一つ大事なことがあると思っています。

それは、いけないことはいけない、ダメなことはダメとしっかりと教えるということであります。

子どもが小さければ小さいほど親はあれこれと注意をして、危ないことのないように、間違ったことを覚えてしまわないように、気を配りながら子育てをするのだと思います。

何でも子どもの思いのままに、何の注意をすることもなく子供を育てあげるということは不可能に近いと思います。注意をすることも間違いを正すことも、すべて子どもを思う親心ゆえのことだと感じるのであります。

教祖はいつもお優しいというイメージがありますが、私はその優しさというものは注意をなされないというような優しさではなく、常に子どもである私たちのことを先々まで考え、時には厳しく、時には優しく、温かく大らかな心で守り導いて下さる、そんな優しさだと思っているのであります。

教祖はここという時には、なあなあで済ますのではなく、どうでも必要な考え方や心構えをはっきりと述べて下さったと思っています。

成ってくることを素直に受け止め、親神様の思召を求めて、そのお働きに感謝して通るのだということを、時に応じて旬を逃すことなく伝えようとなされたのではないでしょうか。

厳しいことを見せるのも、注意をするのも、それが相手を育てるために必要だからでありましょう。そしてそうしたことは、相手の人が注意をしたら分かってくれる、厳しいことを言っても見せても受け止めてくれる、大丈夫だ、という時にそれをすることが大切だと思います。そこを間違えると失敗してしまうのだと思います。

親神様は乗り越えられない人には、決して乗り越えられない節はお見せにならないと思います。少し頑張ったらこの人なら乗り越えられること、少し工夫をすればこの人なら通り切ってくれることを見せて下さっているんだと思うんです。

私たちが毎日毎日暮らしていく中には、必ず喜べないことが現れてまいります。楽しいことや嬉しいことばかりというような、自分が望むことばかりが現われてくる、そんな毎日はまずありえないと思います。

毎日の暮らしの中には、喜べないこと、苦しいこと、辛いこと、面倒くさいこと、そんなことがいっぱいであります。それらすべてを喜んで通れと言われても、それは難しいことでしょう。

しかし、その中の一つでも二つでも喜べれば、あるいは、これもまた結構なんだと受け止めて通ることができれば、喜べないことが減って、喜べることが増えるわけでありますから、それまでとは随分違った毎日になるのではないでしょうか。

私はそのための大切な考え方の一つが、しんどいことも苦しいことも、親神様が私のためを思って見せて下さっているんだ、自分の親が我が子を育て導くために見せて下さっているのと同じだというように、親の心に思いを致すということだと考えているのであります。

たん〳〵とこのみちすじのよふたいハ　みなハが事とをもてしやんせ　（十―104）

とお示し下さっています。

私たちの身に、また身の回りに見えること聞こえることは、すべて自分に向けて親神様が見せて下さっているんだと聞かせて下さっているんだと受け止めて、そこに込められた親心、思召を思案することが大切です。

明治三十五年七月十三日のおさしづに、

この道の掛かりは、先ず一代という、どうでもこうでも不自由難儀の道通らにゃならん。不自由の道通るは天然自然の道という。神の望む処である。

とお示し下さっています。

教祖は私たち人間の目から見れば、苦しいことだらけの道を、喜べないことばかりの道をご自身が通って道をつけて下さいました。

不安の中でも大丈夫、不自由な中でも大丈夫なんだと、後に続く私たちのために、自らそうした中を通って下さっていた、それがひながたの道なんだと思いますと、何か非常に力強く感じられるのであります。

ですから私たちが、難儀不自由な中を通ることになっても、不安の中を通ることになっても、必要以上の心配はいらないと思います。そうした道を教祖が先頭切って通って下さったのであります。それは、まさに自分が今、ひながたの道を辿らせて頂いているんだ、そう悟らせてもらえればいいのであって、なんら不自由だ、不安だと不足に感じなくてもいいんだ、そう、私は悟らせてもらいたいと思っているのであります。

◆年祭に向かって◆

教祖百四十年祭が近づいてまいりました。教祖の年祭は成人の旬だと聞かせて頂きます。しかし年祭は成人の旬だからと言って、年祭が近づく今、何もせずにじっとしてるだけでは成人はできません。

私たちが成人の旬に成人するためには何をすればいいのでしょうか。私は今、それははっきりしていると思っています。

諭達四号に「御存命でお働き下さる教祖にご安心頂き、お喜び頂きたい」と記して下さっているではありませんか。それをさせて頂いたらいいのだと思います。

今それぞれが置かれている状況の中で、教祖にお喜び頂けることは何か、ご安心頂けることは何か、これをしっかり考えて実行に移していこうではありませんか。考えて何か感じて終わりではなく、それを身に行ってこそ意味があるのだと思います。

教祖の年祭に向かって、大教会で目標を立て、それぞれの教会ではその目標をもとに自分たちで目標を定めて歩みを進めてこられたことだと思います。まっすぐに一生懸命通っているつもりでも、知らず知らずのうちにズレが生じてくることもあるでしょう。

年祭の日まであと一年少々というこの時に、今一度大きな目標を見つめ直し、それぞれの教会の歩み、また、一人ひとりの歩みを振り返ってみて頂きたいと思います。

その上で、もしそこに修正するべき点があるのならそこを改めて、また、緩んでいた所があるなと思えば、そこを締め直して、最後の一年への歩みに生かして頂きたいと思います。

それともう一点お願いを申したいのは、何よりも教祖のひながたを辿らせてもらうんだという気持ちを、お互いに強く持って歩ませて頂きたいということであります。もちろん人様に喜んでもらえるよう、人様の力になれるよう一生懸命に動くことは大切であります。

しかし、私は教祖のお通り下されたひながたの道は、たすけ一条の道であるのと同時に、神一条の道であると言ってもいいと思っています。たすけることばかりに目がいって、神様を思う心、神一条になるという心をうっかり忘れてしまっては何か申し訳なく思います。

ひながたの道をひながた通りに歩むためにも、神一条の心で通ることができるようにお互い努力をさせて頂きたいのであります。神一条の心に近づくことができれば、そんな努力を重ねていけば、私は自然と人をたすける心、親神様、教祖に喜んで頂けるおたすけ心が生まれてくると信じているのであります。

何事も、物事を進めるにあたっては順序があるということを忘れず、自分のことも人様のことも、その順序を飛ばすことなく、必要な時間や必要な手間を惜しむことなく、コツコツで良いのですから、結果を求めすぎるがあまり、焦ってしまうことのないように通らせて頂きたいと思います。

親神様の親心、そして教祖のひながたをただひたすら求め見つめて、一歩一歩、歩みを進めて通るなら、必ず年祭の日になるほどと思える、そう導いて頂けると信じます。

真柱様は十月二十六日の大祭におきまして、三年千日の期間は動かせて頂くことが大切なんだ、一生懸命取り組んで年祭の当日、その日を嬉しい心で迎えることができるように、まだ三分の一残っている三年千日を勇み心を奮い起こして通ってもらいたい、という意味のお話をして下さいました。

どうかあと一年余り、教祖百四十年祭のその日に教祖に喜んで頂けるように、安心して頂けるようにお互いしっかりと歩ませて頂きましょう。

神饌場・神具庫大掃除

大教会の神饌場・神具庫の大掃除が、11月13日行われた。

普段、神饌場には神饌物が、神具庫には祭事備品が置いてあるため、なかなか掃除する機会がないが、全ての物を出して綺麗に埃を払わせて頂いた。大勢のひのきしんありがとうございました。

修養科事前研修会 よろこびセミナーを受講して

誠綱　工藤　彩郁

前回の受講から2ヵ月しか経っていませんが、講義の先生によっては、同じ話でも感じ方が全く違い新鮮な気持ちで受講させて頂きました。

また、親子で参加することができて、とても嬉しく思いました。次は、叔母を連れて来たいなと新しい目標ができました。

天理教を全く知らない方の素直なお話も聞かせて頂き、自分の信仰について改めて考える機会にもなりました。

家に戻ってからも、学んだことを生かして、またおたすけに励んでいきたいです。

誠綱　工藤　美由貴

自分にある癖を取らないといけないなと思いました。八つのほこりは難しいですが、自分なりに頑張ります。（特にはらだち）

いんねんに良いいんねんがあるということを考えたことがなかったです。病気や悩みは、神様のお知らせであり、気付きが必要だと感じました。

日々、感謝をしてひのきしんに励み、多くの方々をおたすけできるよう、努力していければと思います。すべては陽気ぐらしのために。有難うございました。

誠綱　高井　良美

今までは自分でどうにかしなくてはならないと気を張っていましたが、講義を受けていく中で、一つ一つ皮がはがれていく感じがしました。

そして、頭で考えすぎて、心で感じていなかったことに改めて気付きがありました。

今回、大教会に来るまでは、たくさんの不思議が重なって、無事に受講できたことにとても感謝しています。この気持ちを忘れずに、日々生活していけるように、陽気ぐらしにつとめていきたいです。

誠綱　本間　亜由美

2回目の受講ですが、色々なことがあり、神様のお話を聞かせて頂き、日常生活に戻った時に、日々自分には何ができるかを見つけたいと思い、今回受講させて頂きました。

今まで、自分のいんねんが分からなかったけれど、今回の講義を受けて、自分のいんねんの自覚ができ、辛かった事柄も全て神様からのお計らいで、いんねんを切るためだったのかもしれないと思うと、ありがたいなと思えることができました。

陽気ぐらしをするために、色々なことを喜んで通らせて頂く、心の筋トレをさせて頂く機会をもらえてありがたかったです。成ってくることに喜んで毎日を過ごしていきたいと思います。

誠綱　三浦　玲奈

自分を今どう変えたらいいのか、その解決策は？という疑問に、何か活かせたらと、今の自分以外の考え方を身につけたいと思って受講しました。

今回受講してみて、今の自分のままではなく、何か変えなければということに気付き、人だすけをしていきたいと思いました。

そして、自分の中にある「ほこり」を少しずつきれいにしていきたいです。

今悩んでいることが、天理教の教えを学んだことで、少し心が軽くなりました。日常生活で活かしていきます。

研修に来るか迷っていましたが、来る前より大きな収穫がありました。

誠綱　八重樫　隆

ねりあいや夜の茶話会で、本音や悩みなどを話せる場があったお陰で、一緒に来た方が学びだけでなく、実際どう考えたらいいかの種を頂き、ありがたかったです。

教会やおぢばにつなげて頂き、本人自ら気付きをもらえるようにする。ここをもっとさせて頂きたいと思えた3日間になりました。たすけて頂き、ありがとうございました。

立教187年 人のご守護 心定め

初席者	ようぼく	修養科修了者	教人
60名	29名	18名	11名
成果（11月末現在）			
13名	7名	9名	1名

修養科事後研修会 ひながたセミナーを受講して

網昇　岡澤　啓子

自分に足りないものが、おぼろげながら見えたような気がします。

毎日の朝夕のおつとめも、ゆとりをもって真実を込めてさせて頂くよう心がけ、日々おかきさげやおふでさきを拝読するようにしたいです。

長年、教会に通っているだけでは成人できません。このような機会も重要なことだと思いました。

武士分教会 就任奉告祭

武士分教会（佐呂間町）では、五代会長村井淳会長が出直されたため、その後を受け、村井実さんが六代会長として、10月26日に任命のお許しを戴いた。

11月14日（木）午前10時より、大教会長様・奥様・紋別支部長をはじめ、大勢の参拝者が集い、就任奉告祭が執行された。

コロナウイルスの感染・拡大を鑑みて、祝賀会は中止とし、記念品とお弁当を頂いて解散となった。

動静

11月人のご守護

○修養科修了者（1名）
陽光　桐谷厚平

○修養科志願者（2名）
栗沢　岩崎史也
眞壁弘道

○おまもり下付願（1名）

○をびや許し願（1名）

育英会寄付者

姉﨑真理子様（父葬儀）
美幌分教会様（三代会長20年祭・四代会長10年祭）
武士分教会様（六代会長就任奉告祭）

大教会11月の動き

1日　役員会会議
2日　お話し会
3日　ようぼく一斉活動日
　　会場。縦の伝道日
　　お社掃除
4日　網走支部例会会場
9日　役員会会議
10日　世話人先生ご到着
11日　月次祭。世話人先生
　　ご巡教。役員会会議。
12日　連絡会。婦人会例会
13日　教会長夫妻練り合い。
14日　修養科事前研修会よろこびセミナー（15日まで）
　　会長、教区祭会議出席
16日　修養科事後研修会網走ひながたセミナー（17日まで）
17日　縦の伝道日
20日　会長、札幌方面直轄信者まわり（22日まで）
23日　会長おぢばがえり。詰所23会
24日　会長、本部神殿奉仕つとめる。縦の伝道日
26日　本部月次祭遙拝。会長、教区主事会出席。結城和広役員、本部神殿奉仕つとめる
27日　会長、かなめ会出席。藤山重善役員、本部神殿奉仕つとめる
29日　大教会一斉活動日
30日　みそか会

教祖140年祭

立教187（令和6）年人のご守護成果表（11月末現在）

教会名	初席	中席	ようぼく	修卒	教人	帰参者 当月	帰参者 累計	教会名	初席	中席	ようぼく	修卒	教人	帰参者 当月	帰参者 累計
直轄		6		1		6	92	誠央						9	40
美幌							4	常道							3
女満別			2	2		3	71	徳道		4				2	37
斜里町							1	満金							1
釧厚							6	網安							1
武士						1	7	オホーツク	2						64
常呂		2				2	54	網徳			1				5
旭網		1				1	19	栗沢	1					4	13
御料						1	3	徳元	1	4					18
東藻琴							1	網盛		2	1				6
陽光				1		2	17	網新			1		1		9
呼人						1	14	網葉							2
誠陽		1				1	15	網陽							4
網栄	1	1					5	誠網	7	21	2	4		3	101
實東	1	1				1	46	網次						1	18
東網				1			2	網昇		2				1	23
宗稚						1	16	勇走						1	12
								詰所						3	144

初席 当月	初席 成果	中席 当月	中席 成果	ようぼく 当月	ようぼく 成果	修卒 当月	修卒 成果	教人 当月	教人 成果	帰参者 当月	帰参者 成果
	13		45		7	1	9		1	44	874

11月　月次祭11/12㈫

〈参拝者数　約90人〉

神殿講話	賛者	指図方	扉者	祭主	祭員	祭典役割
久保先生	遠田三清菅 藤中澤宮原 浩　春秀明 二繁雄明宏	新川正人	小結城 松　篤和 志　広	大教会長		
胡三味琴弓線	小すり太拍ちゃが子ん笛ぽ 鼓ね鼓木ん	地方	てをどり			
瀬丸藤川山井とのり道江子恵	栗丸三澤大瀬 林山幣田山川 徳一正忠雅定 正徳志和人自	藤結久山城保先 重和 善広生	三栗大細新大 幣林教木川教 リ会 輝ツ長善正会 子子人信人長		座りづとめ	
澤斎藤田藤山里裕恵真子子理	菅小遠小青桐 原針田松山谷 明敏眞篤正善 宏文明志博広	田瀬三中川幣 陽敦 繁一志	大三山遠在斎 山澤崎藤原藤 由 泰美蔦明道芳 子子代広彌徳		前半	
菅栗三原林幣美代真直弓美子	新三清吉清岩 川澤宮村水原 正春秀光信 美雄明正喜繁	遠清奥藤水野 浩知直 二幸治	三瀬結安眞永 幣川城田壁井 美 有祐和光正康 子子子広教幸		後半	